

發行人：前橋競輪
企画編集：e-SHINBUN

日本選手権競輪 記者達の忘れえぬ思い出

2000年千葉・岡部芳幸

今から25年前だから、記者が32歳の時。「IT革命」がその年の流行語大賞で、「おっはー」と言う言葉も流行っていた。当時、専門紙・赤城スポーツの記者だったが、先輩記者が厳しく第一線での活躍が難しい時代だった。ここと違い、ビッグレースや記念の取材に行かせてもらえず、現場取材は前橋競輪場だけ。まだ「よこれ記者」と呼ばれる前で、記憶が確かならば、最終日だけ現地に遊びに行ったと思う。

優勝は岡部芳幸だが、小嶋敬二の視点から今回の記事は書いてみたい。この年になると昔の事の時系列がバラバラになるので、直接、小嶋選手に聞いてみたり、先輩記者からもレクチャーを受けた。結果は岡部、西川親幸、小嶋で入り2車単は7－5で10980円。某スポーツ紙の大御所記者に改めて教えてもらったが、このダービーの時に現地で2車単の発売は行われていない。全国统一でなく、売り上げの良い競輪場（1号から4号賞金まであり、競輪場により賞金も違った）から2車単の車券を先行発売。現地の千葉では買えず、2車単を売っている場外に行くか、電話投票で買うしかなかった。元々、車券は下手だが、この時も現地で買えた、枠複の4－5、2080円は当たらなかったと思う。3連単が発売されたのは、この1年後の11月からで立川と前橋が先駆けての発売だった。

実際のレースはダイジェストで見て戴き、前受けは小嶋と山田裕仁。今で言う前中国が齋藤登志信に岡部、逃げると思われていた市田佳寿浩には内林久徳、後ろ攻めが九州勢で吉岡稔真、西川、西尾芳樹。今では解説者としてもS班の山田氏、吉岡氏、内林氏がいるから、新規ファンもお馴染みの選手ばかりだと思う。GIの解説は鈴木保巳さんと白鳥伸雄さんが交互、MCが高橋しげみさん、実況が磯一郎さんが定番だった。白鳥さんは千葉だが、他の3人は群馬在住だから僕の恩人でもある。この時代、古館伊知郎もビッグレースの中継に出演していて、プロレス実況を競輪の実況に取り入っていた。内林さんを「琵琶湖のピラニア、えら呼吸走法」とか名調子し、今聞いても面白い。

今のレース形態は絶対、前受けが有利。だが、当時の前受けは「受けて立つ」と言う競輪用語があった様に、強い人が敢えて不利を覚悟でSを取る戦法だった。普通なら吉岡の前受けと思いきや、中部勢が前を取っている。これを小嶋に確認したら「1回目はスタート牽制で再発走。当時は、今より、緩いからペナルティもなく何度でも再発走ができた。2度目は、ファンから『お前が一番強いから、山田、前を取れ!』のヤジがあった。それで、発走機を出た瞬間に山田さんと目が合い、俺がSを取った感じ（笑）」。これが結果的に良く市田のカマシの3番手を確保。バックから捲ると市田を楽に捉えて、番手の帝王（山田）は、うっちー（内林）と絡み、社長（小嶋）には絶好の展開。今の寺崎浩平と一緒に脇本雄太と古性優作に差されてはタイトルを取れない。社長にすれば、帝王は一番の味方であり敵でもあった。「今、考えると山田さんがいて良かったと思う。幹旋とか、対戦メンバーとか色々なメリットがあったからね。あの仕掛けた瞬間？　捲れる手応えはあったけど、押し切る感覚はなかった。実は、前年の静岡のダービーで、神山さんに勝ったと思い、間違えて手を上げているので（苦笑）」。社長のタイトル数は、寛仁親王牌を2個、高松宮記念杯を2個の全部で4個。人間の良さは山崎芳仁と双壁だし、この2人が人間グランプリの覇者。もっと、社長が悪い人間で、ずる賢さがあったら、この倍以上のGIコレクターだっただろう。本人も「宇都宮の500人を一人で2周駆けたり、今、考えともったいない。どうせ、逃げ潰れて大敗なら、最初から一発狙うレースの方が良かった。あの当時は、それより同型の伏見や太田、十文字に先行争いで勝ち事に重点を置いていたからね。そこが今の子どもと考えが違ってくる。」そして岡部の優勝に関してだが、最後は自分で外を踏み突き抜けている。今は前を庇い、少しでも残るのが美德となっているが、ファンの車券戦術とは乖離がある。あの当時の岡部や伏見は、きちんと踏み、1着を取ってくれた。これも何度も書いてきたが、あの当時の岡部や伏見の走りを、養成所で見せて欲しい。こんな素晴らしい教本はないし、神山所長なら実現させてくれるかもしれない。（町田洋一）

2011年名古屋・村上義弘

名古屋でダービーがあるとなると、ホットでクールでもある村上義弘（京都・73期）がよく勝った姿を思い出す。中でも思い出深いのは、大会初優勝になった2011年の決勝。近畿ラインで目標にした市田佳寿浩が落車すると、すぐに機動戦にチェンジしたあの走りだ。序盤から中盤、終盤へと、勝利の女神があちらこちらに振り向いた接戦を制してみせた。

ヒーローは共同見でこうつぶやいた。「市田がプロテクターを着けていなかった」と。

この前に既にGI覇者となっていた2人。片や村上が初優勝を遂げた02年の岸和田全日本選抜は別線で戦い、片や市田の初優勝は10年の前橋寛仁親王牌で村上の番手まくりをかわした賜物だった。互いを認め合うからこそ、時に分かれて力勝負し、組む時でも作戦会議を開くのは野暮でご無用というもの。もちろん、ビッグ戦線の中央に位置し、捨てて先行するヤングの立場はとうに卒業していた。

ただ、ともに力を出し切ることが信条でも、果たしてどういう走りで力を出し切るのか。村上は号砲からすぐに、目の前を走る市田の両肩と背中がすっきりしていることに気づいた。こぶがない。プロテクターがなかった。身軽に見える。たびたび落車禍で出世が遅れた盟友が、大ケガを避けるメリットを放り出してまで果敢に仕掛けようとする思いをくみ取った。以心伝心。市田が別線封じに専念するなら、こちらは番手として責任が増す。真後ろには地元中部の顔でもある山口幸二が控え緊張も増した。ところが、気持ちが高ぶるそんな折に、市田は中国で外並走になった長塚智広と接触し、落車してしまった。このとき、残りは2周を切っていた。

熱い思いは冷静沈着なモードに切り替わる。コンマ何秒のことだろうか。先行日本一と呼ばれはじめた村上は、うろたえず本能を呼び覚ます。持てる技と力を示した。落車をひらりと避け、外をさばき、内へと潜りながら中国3番手をキープすると、間髪入れずに自力発進。2角まくりで、逃げていた鈴木謙太郎を4角で捕まえ、山口や、足をためていた兵藤一也の強襲も封じた。

村上は小柄で、競輪学校（現・選手養成所）でも目立たぬ存在ながら、1994年4月に「ただ、特別競輪を勝ってもおもしろくない。先行で勝つ」と大志を抱いてデビューした。あえて長い距離を踏むことを要す、後方から前団を押さえての先行にこだわり、力を付け、さばきも覚えた。たたかれても、外をどかさ。ただけずでも、外並走に耐えながらまた仕掛ける。そうこうするうちに前出の全日選でタイトルホルダーの仲間入りし、翌年には一宮オールスターで逃げ切り優勝し念願をかなえた。

それでも満足できなかった。特別競輪の中でも最多162人が挑み、Vロードが狭く険しいダービーをあえて正式名称の通りに「選手権」と呼び、このGI最高峰レースに集中した。名古屋大会は2011年を皮切りに、現役引退まで開催された3度全て優勝した。13年立川を含めた、4度のダービー優勝は吉岡稔真に並んで最多記録になった。ただ「選手権」で逃げ切りVを果たしておらず、この点でも開志をかきたてられて活躍続けた。

選手間で今では流行りの室内練習は、村上の時代は機器がそろってなく、盛んではなかった。ある記者が「雨の日はバンク練習休むでしょ？」と問うと、「雨でもやりますよ、休むわけないっ。ひとつの妥協が次の妥協を呼ぶのだから」と怒気をまじえて答えた。また、「息抜きはどうやって？」という問いにも、気色ばむ。「息抜きなんかないっ」と返した。プライベートでは腰痛につながるからと、実の子さえ抱いたことがないという。全ては「選手権」で念願をかなえるために意識を注ぎ、あの市田が落車した有事にも妥協せず、勝負を諦めなかった。そして記録にも記憶にも残る大選手になった。

2011年の決勝は他にもエピソードがある。2着だった山口は賞金額の上積みから、暮れには12年ぶり3度目の出場となったKEIRINグランプリ（GP）で2度目の優勝を飾った。一方で兵藤は目標が不発の流れで3着の大健闘も、「3着じゃ駄目なんだ」と表情を曇らせた。07年には平塚ダービー2着が効いてGP初出場を果たしており、結果的にその再現ならなかった。

名古屋大会は今回も名レースを生み、暮れの大一番への流れもつくるだろう。春の天王山は開幕が迫っている。（某スポーツ紙・記者）

2008年静岡・渡邊晴智

この企画を聞いたとき真っ先に「晴智が勝った静岡ダービー」が頭に浮かぶんだ。理由はよく分らない。車券で大儲けした記憶もないし、自分自身でもなんだろう？という感じだが、とにかく、脳内の引き出しから最初に出てきたのがこの大会だった（静岡で行われたダービーで静岡の選手が勝ったから...というの、もしかしたら少しあるかもしれない）。今から17年も前のことだから、シリーズ全体の流れはほとんど覚えていないが、ファンの間ではやはり晴智の地元優勝！というムードが高まっていたと思う。2車単のオッズも、晴智が山崎を差す①⑥が一番人気だった。

他のメンバーを見渡すと、当時25歳の平原康多がいる。2008年ということはまだ平原が強くなりはじめたくらいで、のちに平原－武田時代が訪れるなんてこの時は誰も知らない。そして、懐かしいな藤原憲征の名前もある。藤原、昔はホント強かった。新潟のエースと言えば諸橋愛より断然藤原だった。

中部の4人も「中部王国」と呼ばれていた時代の最強メンバーで、今の選手に置き換えたら、脇本雄太－古性優作－村上博幸－南修二みたいな連係。番手下3人はすでに引退しているが、いまだに現役バリバリの小嶋は色んな意味で「どうなってるの？」という感じだ（笑）。

レースは前受けが山崎、中国に小嶋、後方8番手に平原で淡々と進み、平原が押さえた上で小嶋が更に押さえたが、小嶋が流しているところを山崎が一気に叩いて主導権。ゴールは絶好ハコ回りの晴智がズバツと抜け出し悲願の優勝。中割り迫る合志は届かず2着で、逃げた山崎が3着という結果だったのが、個人的には、勝った晴智よりも、惜敗2着の合志が悔しがる姿の方が印象に残っている。

優勝するはここしかない！と躊躇せず山崎と晴智の「間」を狙ったゴール前、「頭」まで届かずガクンとうなだれるゴール直後、その隣りで喜びを爆発させる晴智。この数秒間はまさにドラマだったし、勝者と敗者の明と暗がはっきり分かる瞬間だった。それもあって、自分の中では晴智が勝った静岡ダービー＝合志が勝てなかった静岡ダービーとして記憶している。

ちなみに晴智は直後に行われた高松宮記念杯も優勝してGI連覇。この年の獲得賞金は1億円を超え、名実ともに超一流レーサーとなった。（アオケイ・長谷川）

【5月開催】GI・GⅡのレース展望

4/29（火・祝）30（水）5/1（木）2（金）3（土・祝）4（日・祝）
名古屋 日本選手権競輪 **GI**

過去10年のダービー王は、平原康多、山口拳矢、脇本雄太、松浦悠士、脇本雄太、三谷竜生、三谷竜生、中川誠一郎、村上義弘。2020年は新型コロナの感染拡大の為、開催は行われなかった。昨年の優勝賞金は8200万円、かなり高額のある大会。特別競輪の中でも最も権威のある大会で、選手のモチベーションは高い。

今年のダービー王は古性優作とみたい。オールラウンダーとして、すでに競輪史に名前を刻んでいる。ダブルグランドラムに向けて、何としても欲しい称号だ。脇本雄太、寺崎浩平と連係して、若手の底上げも望んでいる。3月開催のウイナーズカップの優勝も圧巻だった。

今は地区対抗戦の要素が強いので、深谷知広、郡司浩平、岩本俊介の南関ラインも強力。深谷と郡司は逆並びでも成功しており、その時々で変化。番手を回った方が当然、勝率が高く、前後の並びは興味深い。岩本は3番手でも信頼度が高まり、技術の無さを脚力でカバー。

新山響平もウイナーズカップで優出して、着以上の強さを魅せていた。基本は突っ張りだが、狙ったの捲りが決まる様になれば、タイトルを量産。

関東は眞杉匠を中心に機動型の質も高い。佐々木修葵や吉田拓矢、坂井洋と一線級が揃っている。

中部は山口拳矢と浅井康太だけでなく、纈瀬洸翔と藤井侑吾が育ってきた。まだGIでの活躍はないが、地元バンクで大化けするかも。

中四国は松浦悠士を指令塔に清水裕友、大伏湧也や取島雄吾も貴重な戦力。九州はGIになると厳しい戦いになっていくが、6日制のシリーズでラッキーボーイの出現もありそう。

5/10（土）11（日）12（月）13（火）
平塚記念 **GⅢ** **ナイター**

脇本雄太は早々と不参加届けを出している。S班のメンバーは地元で郡司浩平を筆頭とし、岩本俊介、大伏湧也の3人。日本選手権直後の大会になるが、郡司はダービー王になっている可能性もあり、責任を持つて4日間走る。ホームバンクは川崎だが、平塚、小田原も同じくモチベーションで走っている。この大会は4年前の71周年で制している。地元は他に松井宏佑、和田真久留もあり、南関祭りになりそう。深谷知広や、岩本俊介もいて、郡司浩平にとっては心強い。

大伏湧也のパワー駆けも魅力。4月にS班に繰り上がり、言動も更に確りしてきた。四国で香川雄介、小川真太郎、久米良が連係する。

北日本の主力は山崎芳仁、飯野祐太、永澤剛で厳しい戦いになりそう。関東は森田優弥に武藤龍生の埼玉コンビに吉澤純平。中部は山口拳矢、近畿は南修二と三谷将太だが、ワッキーの不在が痛い。

九州は荒井崇博が元氣いっぱい、伊藤颯馬、北津留翼、松本秀之介が前で引く張る。

5/15（木）16（金）17（土）18（日）
宇都宮記念 **GⅢ**

500バンクの攻防戦にS班は眞杉匠、古性優作、新山響平、平原康多、清水裕友と豪華メンバーの布陣。もちろん注目を集めるのは地元で眞杉。ロングの仕掛けだけでなく、柔軟なヨコの動きは若手機動型の憧れになっている。完璧に仕上げて、自力で完全優勝を目指す。アシスト役は落車過多から立ち直りの気配がある平原。関東の総大将としての人望は健在。御大の武田豊樹もいて、関東全体が引き締まる大会だ。スピドスターの坂井洋、徹底先行スタイルの吉田有希、うるさ型の神山拓弥、長島大介や雨谷一樹も決勝進出を目指す。

北日本は新山、菅田竜道、佐藤慎太郎の布陣。新山にとって眞杉はレイスでかち合う天敵になっているが、日本一の先行で間違いない。菅田は地道にレースをやっていれば必ず、天下は取れる。慎太郎は骨盤骨折の重傷を負い、走りながら治している最中だ。

主力陣は平塚記念に幹旋があり、南関の大物は不在。中部は浅井康太だが、近畿と連係できるかが問題。近畿は古性を中心に、窓場干加頼と山田久徳。どんな展開でも古性は人気になり、それに期待に応える男。昨年から急に強くなった窓場も信頼度は高い。

中四国は清水に松浦悠士。以前は逆回りもあったが、近況、清水が前回りで固定。松浦は競輪博士で競輪IQは高い。3番手も岩津裕介で確りしている。

九州は嘉永泰斗、伊藤旭、小岩大介が主力級のメンバーで、このバンクで中川誠一郎も実績がある。

5/20（火）21（水）22（木）**ミッドナイト**
武雄ミッドナイトG3 **GⅢ** **ガールズケイリン**

4月の記念で優勝している地元の山田庸平が当然のシリィズリーダー。兄の英明が欠場になった分も責任のある走りを披露していた。捲りもある脚力は、目標と後方になっても安心して見ていられる。ミッドナイトだし、あそこまで仕上げてこなくても自然と勝てるだろう。九州の自力型は北津留翼、阿部将大で、追い込み型は井上昌己と山口敦也。

北日本は小松崎大地と坂本貴史。今年に入ってから小松崎は良くないが、いつ覚醒してもおかしくない。思い切った走りが出来るのも魅力。

関東は鈴木竜土の自在戦で2月の小松島ミッドナイトG3で優勝とミッドとの相性も良い。戦勝に長けていて、変幻自在にレースを動かす。

中部はヤンググランプリの覇者の纈瀬洸翔。どちらかと言えば捲りが強いイメージ。近畿は中西大と南潤で、中国は晝田宗一郎のカマシ、捲り。

ガールズケイリンはグランプリ覇者の石井寛子が断然だ。自然と好位を確保して突き抜けるスタイル。普段からストイックに競輪に向き合っている。時折、自力も出している那須萌美も乗れている。4月中旬の段階で、今年も3回の優勝勝ち上がりにも失敗せず、準優勝も4回ある。3番手の評価が飯田風音で、又多風緑や長澤彩も決勝に乗ってくる。

